甲賀市文化財報告書　第19集

甲賀市埋蔵文化財調査年報

平成22年度試掘調査

２０１２

甲賀市教育委員会

序

滋賀県の南東部に位置する甲賀市は豊かな自然に恵まれ、国指定史跡「紫香楽宮跡」・「垂水頓宮跡」・「甲賀郡中惣遺跡群」などをはじめとした歴史資産も豊富です。甲賀市には現在、約 530 箇所の埋蔵文化財包蔵地が確認されており、その数は県内でも有数です。また、甲賀市は関西圏と中部圏の中間に位置しています。そして、それらの新名神高速道路が市内を横断して両者をつないでいます。このような立地によって今後、市のさらなる発展も期待されています。

埋蔵文化財は地中に埋もれている性格上、目にする機会が少ないものです。しかし、そのような地中に埋もれる文化財に光をあて、その「物語り」を聴きとることで郷土の歴史を深く理解することができるのです。このような埋蔵文化財を様々な開発から保護し、さらに記録に留めることも教育行政の大きな責務です。

教育委員会では市内の様々な開発に伴い、埋蔵文化財の試掘調査・確認調査を実施しています。そして、それらの調査の中で地域の歴史を語る上で非常に重要な知見を得ることができました。その調査成果をまとめた本報告書が甲賀市の歴史を解明する一助となり、市民の皆様をはじめ、広く活用されることを願っています。

最後になりましたが、調査に参加していただいた方々、報告書作成にあたり、ご協力をいただいた方々に心より感謝申し上げます。

平成 24 年（2012 年）3 月

甲賀市教育委員会
教育長　山本　佳洋

例　言

1．本書は甲賀市教育委員会が平成22年度に実施した試掘調査と試掘調査に伴う整理調査の内容をまとめたものである。

2．本書で報告している試掘調査にかかる経費は、国宝重要文化財等保存整備費補助金（国庫補助金）および滋賀県文化財保存事業費補助金（県費補助金）を得た。

3．甲賀市教育委員会における調査体制は以下の通りである。

平成22年度

教育長　山本佳洋

教育委員会事務局　教育部長　友田啓視

次長（管理担当）　立花　実

次長（指導担当）　大谷長一

歴史文化財課　課長　林口幸治

課長補佐　大崎哲人

係長　鈴木良章（埋蔵文化財係）

主査　小谷徳彦（調査担当者）

技師　渡部圭一郎（調査担当者）

4．試掘調査および整理調査にあたり、下記の方々の協力を得た（敬称略・五十音順）。

大上緣　小川悦男　佐藤美紀　杉本義弘　平井正義　平本瞳　廣岡輝治　松井純子

5．本書に掲載した図面は小谷、佐藤、平本が作成し、本文の執筆と編集は小谷が行った。

6．本書で使用した水準高は東京湾平均海面高度を基準とし、座標は世界測地系（日本測地系2000）による平面直角座標第Ⅵ系に基づいている。なお、本書で示す北は座標北である。

7．本書で使用する遺構略号は次のとおりである。

SB：竪穴住居・掘立柱建物　SD：溝状遺構　SK：土壙・土坑

8．本書で報告した発掘調査で出土した遺物や図面・写真類については、甲賀市教育委員会が保管している。

目　　次

第１章　平成 22 年度試掘調査

甲賀市の概要と調査概要 …… 1

水口城遺跡の調査（10-03 次・10-25 次） …… 3

10-04 次　本望寺遺跡の調査 …… 9

10-05 次　竹石遺跡の調査 …… 13

10-13 次　上馬杉遺跡の調査 …… 19

10-17 次　北泉遺跡の調査 …… 23

10-19 次　倉治城遺跡の調査 …… 29

10-20 次　紫香楽宮東遺跡の調査 …… 31

10-21 次　大垣外遺跡の調査 …… 35

第２章　08-27 次（貴生川遺跡）出土遺物 …… 39

第１章　平成 22 年度試掘調査

甲賀市の概要と調査概要

甲賀市は滋賀県の南端に位置し、東西約 43.8 ㎞、南北約 26.8 ㎞を測る。面積は 481.69 ㎢で滋賀県全体の約 12％を占め、県内第３位の面積である。琵琶湖に面していない内陸部に位置するが、大阪・名古屋からそれぞれ 100 ㎞圏内にあり、近畿圏と東海圏を結ぶ役割を果たしている。

市内には総数 530 ヶ所あまりの遺跡があり、紫香楽宮跡、甲賀郡中惣遺跡群、垂水頓宮跡の国指定史跡をはじめとして歴史的に非常に重要な遺跡が数多く存在する。

近年の市内での開発件数は横ばい状態であるが、合併後に埋蔵文化財包蔵地が増加したため、埋蔵文化財包蔵地内での開発件数が増加傾向にある。

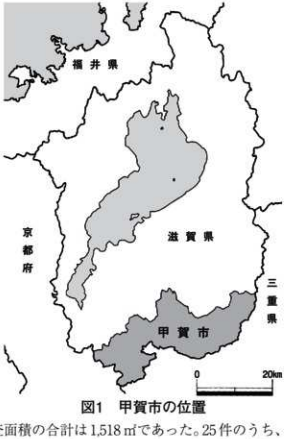


図1　甲賀市の位置

平成 22 年度は年間 25 件の試掘調査を実施し、調査面積の合計は 1,518 ㎡であった。25 件のうち、遺構を確認した調査が３件、遺物の出土した調査が９件あった。そのうち１件が記録保存の発掘調査の対象となった。本報告書では平成 22 年度に実施した試掘調査のうち、埋蔵文化財包蔵地内で実施した調査についての概要を記す。

表１　平成 22 年度実施試掘調査一覧表

調査次数	調査開始日	調査終了日	調査地			目的詳細	遺跡名称	結果				
			町名	大字	対象面積			調査面積	遺物	詳細	遺構	詳細
10-01	H22.4.13	H22.4.13	水口町	北脇	3,263.51	屋内テニス場	北脇遺跡近接地	45.00	○	須恵器、瓦器	×	
10-02	H22.5.7	H22.5.7	水口町	貴生川	1,904.65	神殿建設		20.00	×		×	
10-03	H22.5.11	H22.5.11	水口町	本町	235.41	個人住宅	水口城遺跡	15.00	×		×	
10-04	H22.5.25	H22.5.25	甲賀町	大原市場	3,378.73	分譲住宅造成	本望寺遺跡	40.00	×		×	
10-05	H22.5.20	H22.6.10	水口町	三大寺	8,916.97	認定こども園		215.00	○	須恵器、土師器、瓦器	○	竪穴住居、掘立柱建物
10-06	H22.5.27	H22.5.27	水口町	泉	431.77	個人住宅	北泉遺跡	9.00	×		×	
10-07	H22.6.11	H22.6.11	土山町	北土山	1,205.40	駐車場造成		50.00	○	土師器、陶器	×	
10-08	H22.6.25	H22.6.25	水口町	山上	772.19	公民館建設		9.00	×		×	
10-09	H22.8.5	H22.8.5	水口町	山	22,738.84	地域福祉老人ホーム			×		×	
10-10	H22.6.21	H22.6.21	水口町	新城	1,673.71	宅地分譲	北沢遺跡近接地	50.00	×		×	
10-11	H22.7.20	H22.7.21	水口町	牛飼	4,394.97	コンビニ建設		110.00	×		×	
10-12	H22.7.30	H22.7.31	甲南町	野尻	1,190.40	中古車展示場		50.00	○	土師皿	×	
10-13	H22.11.25	H22.11.26	甲南町	上馬杉	40.00	携帯電話基地局建設	上馬杉遺跡	10.00	×		×	
10-19	H22.10.25	H22.10.27	甲南町	新治	218.73	個人住宅	倉治城遺跡	100.00	○	磁器	×	
10-16	H22.9.28	H22.9.29	甲南町	野田	1,061.63	集合住宅	下滝遺跡近接地	60.00	×		×	
10-17	H22.10.5	H22.10.6	水口町	北泉	526.12	集合住宅	北泉遺跡	40.00	○	須恵器、土師器	○	溝1条
10-18	H22.11.1	H22.11.2	水口町	植	928.63	個人住宅	植城遺跡近接地	15.00	○	土師器、陶器	×	
10-20	H22.12.20	H22.12.21	信楽町	黄瀬	646.22	個人住宅	紫香楽宮東遺跡	25.00	×		×	
10-21	H22.12.1	H22.12.3	信楽町	勅旨	1,091.16	分譲住宅造成	大垣外遺跡	50.00	○	土師器、陶器	×	
10-22	H22.12.7	H22.12.8	信楽町	西	1,453.50	メモリアルホール		50.00	×		×	
10-14	H23.1.25	H23.1.25	水口町	泉	1,026.85	不動堂建築	北泉遺跡近接地	25.00	×		×	
10-15	H23.2.1	H23.2.1	甲南町	寺庄	908.77	集合住宅		20.00	×		×	
10-23	H23.2.14	H23.2.14	土山町	北土山	1,948.14	資材置場		50.00	×		×	
10-24	H23.2.23	H23.2.24	信楽町	勅旨	9,258.00	発生残土処分場		50.00	×		×	
10-25	H23.3.7	H23.3.7	水口町	中屋	194.53	個人住宅	水口城遺跡	10.00	○	土師器、陶器	○	土坑

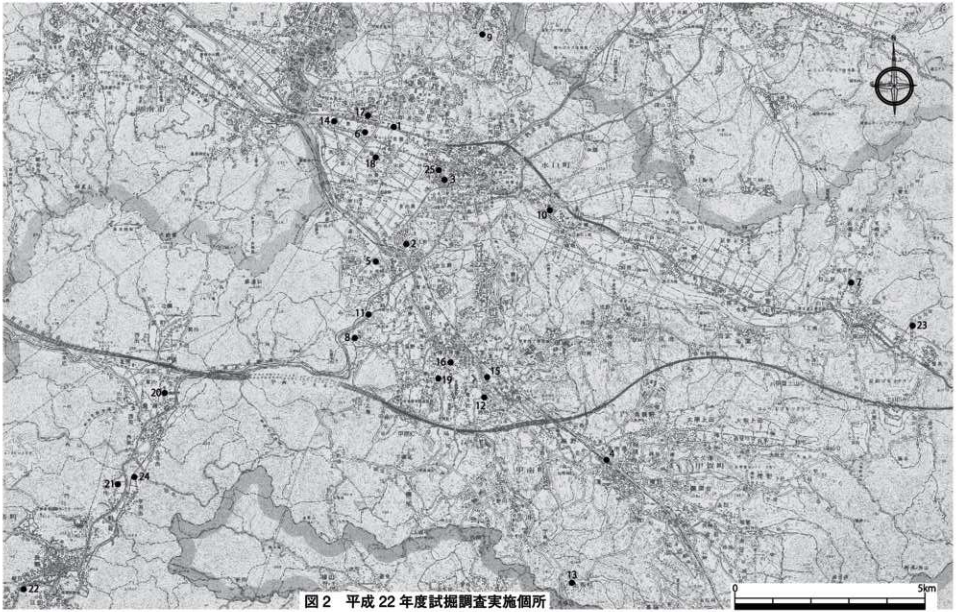


図２　平成 22 年度試掘調査実施個所

水口城遺跡の調査

遺跡の概要と過去の調査

水口城遺跡は、甲賀市の中央北半部、水口盆地の西部に立地する。近世水口宿の西部に城域を構え、近世東海道の南側に隣接する位置にあたる。

水口城は、寛政十一年（1638）、徳川家光の上洛に際して、小堀政一（遠州）によって東海道の宿館として築かれた。東側に張り出した東枡形をもつ本丸跡は、四方を水堀に囲まれている。この本丸跡は滋賀県指定史跡となっている。本丸の周囲を囲む水堀は河川と接続していないが、常に水を湛えており、野洲川の伏流水が流入していると考えられている。水口城が別名「碧水城」と呼ばれる所以である。

水口城の古絵図によると、本丸の北側には二之丸が描かれている。家光の上洛後、水口城は番城となり、二之丸には在番屋敷が設けられた。さらにその後、加藤氏が城主となると、二之丸には藩庁が置かれた。加藤氏の入封とともに本丸の東・西・北にわたって家臣団屋敷が造成され、これらを含めて城地とし、「郭内」と呼ばれた（甲賀市史編さん委員会 2010）。

このような状況から当初、埋蔵文化財包蔵地となっていなかった「郭内」の範囲について、古絵図に描かれている様子や周辺の試掘調査の状況をもとに、周知の埋蔵文化財包蔵地「水口城遺跡」とした。

これまで水口城遺跡で実施した発掘調査は小規模な試掘調査が中心である。

平成 17 年度に二之丸推定地の北東部で実施した試掘調査 H17-1 次では 2 条の溝を検出している。溝内から遺物は出土しなかったが、遺構面直上の整地土層から 18 世紀後半の信楽焼の甕が出土しており、検出した溝は 18 世紀後半を下限とすることがわかっている。

同じく平成 17 年度に本丸の堀の北側と東側隣接地で実施した試掘調査 H17-9 次では、2 面の遺構面を確認した。検出した遺構は溝やピットなどで、出土した遺物から上層の遺構は近世水口城にかかわるもので、下層の遺構は古代から中世のものと考えられている。水口城の築城以前から人々が生活を営んでいた痕跡がみつかったことは大きな成果であった。

また、平成 18 年度には試掘調査 H18-43 次、平成 19 年度には試掘調査 07-29 次を実施したが、どちらの調査も遺構や遺物を確認することはできなかった。

平成 22 年度は水口城遺跡の範囲内において、2 件の試掘調査（10-03 次･10-25 次）を実施した。以下、それらの調査概要について記す。

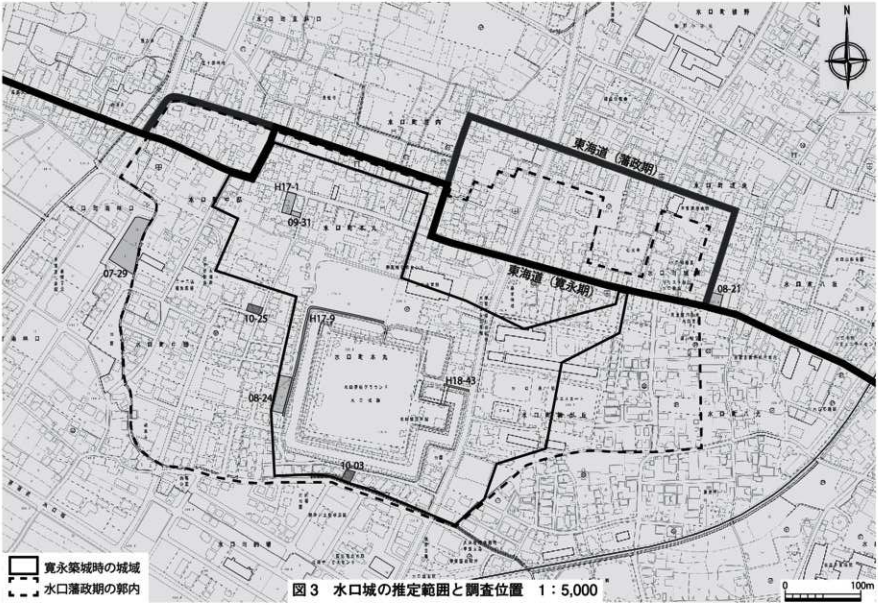


図３　水口城の推定範囲と調査位置　１：5,000

試掘調査 10-03 次

調査経緯

甲賀市水口町本丸地先で個人住宅の建て替え工事が計画された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「水口城遺跡」の範囲内にあたり、水口城本丸跡の南側の堀に隣接する位置である。そのため、工事の実施に先立ち、遺構の有無を確認する調査を実施することとなった。調査は敷地面積 235.41 ㎡に対して、面積約 15 ㎡の調査区を設定して、平成 22 年 5 月 11 日に実施した。

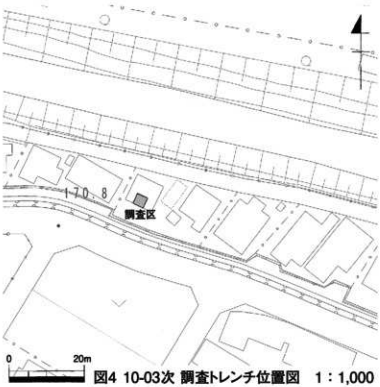


図4 10-03次 調査トレンチ位置図 1：1,000

調査概要

《基本層序》

調査地の基本層序は、上から①黄褐色砂、②灰色砂、③暗褐色粘質土、④礫混じり黄褐色粘質土、⑤褐色砂礫、⑥淡黄灰色ブロック混じり黄褐色砂質土であった。①層と②層は既存建物を解体した後の整地土である。現況の地表面から③層までが約 65 ㎝、⑥層までが約 215 ㎝であった。

《検出遺構・出土遺物》

本試掘調査では遺構および遺物を確認することができなかった。

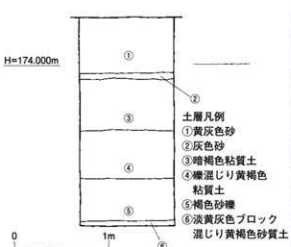


図5 土層断面図 1：40

写真1 調査区全景

試掘調査 10-25 次

調査経緯

甲賀市水口町中邸地先で個人住宅の建設工事が計画された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「水口城遺跡」の範囲内にあたり、水口城の古絵図によると、武家屋敷が建ち並ぶ地域に位置していた。そのため、工事の実施に先立ち、遺構の有無を確認する調査を実施することとなった。調査は、敷地面積194.53㎡に対して、面積10㎡の調査区を設定して、平成23年3月7日に実施した。

図6　10-25 次調査トレンチ位置図　1：1,000

調査概要

《基本層序》

調査地の基本層序は、上から①造成土、②暗褐色粘質土（2 次堆積層）、③黄褐色粘質土（遺構面）、④黄灰色砂質土、⑤灰色砂礫であった。②層から少量の遺物が出土したが、激しく磨耗していた。

③層は遺構面であり、後述する遺構は③層上面で検出した。遺構面の深さは現況の地表面から 80 ㎝であった。④層と⑤層は遺物を含まない地山層であり、④層が現地表面から 100 ㎝、⑤層が 140 ㎝の深さであった。

《検出遺構》

調査区内で土坑を 1 基確認した。土坑は調査区の北東端で検出し、調査区外へ延びる。規模は直径約170㎝と推定され、形状はやや歪な円形である。遺構検出面からの深さは約10㎝であった。

《出土遺物》

調査区内から土師器と陶器が出土したが、いずれも 2 次堆積の②層からの出土であり、特に土師器は摩滅が著しかった。また、出土した遺物はいずれも小破片で時期が特定できるものではなかった。

まとめ

試掘調査 10-03 次では遺構・遺物ともに確認することができなかった。調査地は水口城本丸南側堀の外側に隣接しているが、周辺の現況は宅地となっているため、遺構の残存状況はきわめてよくないと考えられる。断面観察で確認した③層の暗褐色粘質土が遺構面となる可能性もあるが、今回の調査では判断できる資料を得ることはできなかった。⑤層の褐色砂礫層より下層については地山とみて間違いないが、④層の礫混じり黄褐色粘質土については本丸の堀を造成した際の盛土である可能性を考えておきたい。

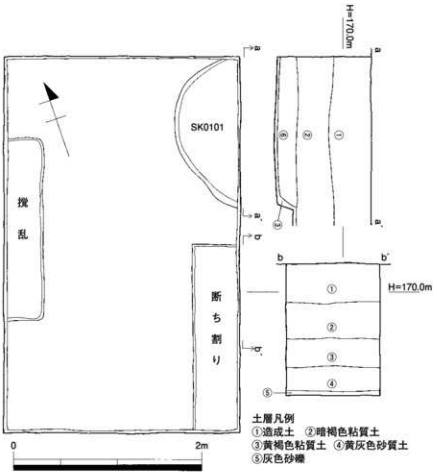


図7 平面図・断面図 1：40

一方、試掘調査 10-25 次では土坑を 1 基確認したが、土坑内から遺物は出土せず、時期を特定することはできなかった。こちらの調査地も周辺が宅地化されており、遺構の残存状況はよくないと推測される。ただし、遺構面と考えられる③層の黄褐色粘質土は明確に確認できる。小規模のトレンチ調査では遺構の全容を把握することは難しいが、今後の周辺の調査成果に注視していきたい。

＜参考文献＞

高田 徹 2010 「水口城跡」『甲賀市史』第 7 巻 甲賀の城 甲賀市史編さん委員会編 甲賀市発行

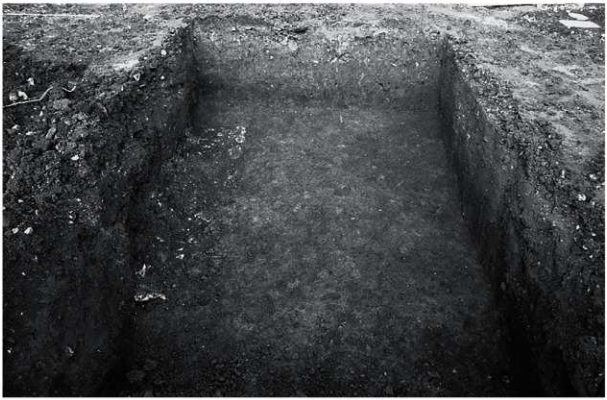


写真２　10-25 次　調査区全景

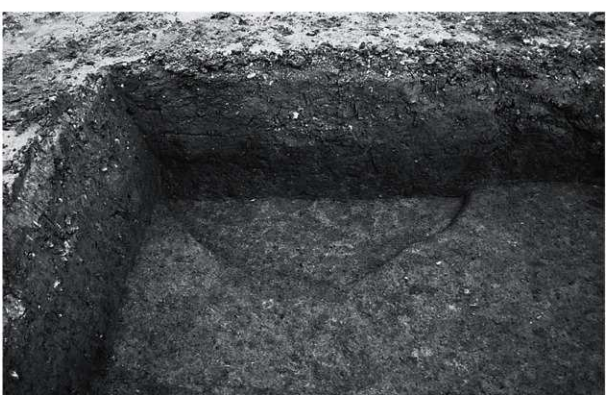


写真３　10-25 次　SX0101

10-04 次　本望寺遺跡の調査

位置と経緯

調査位置

本望寺遺跡は甲賀市甲賀町大原市場字中野陣山に所在する。明治中期に廃絶した天台宗の寺院と伝えられ、現在は隣接する補陀楽寺の境内に墓石だけが存在する。以前は、土塁が存在していたとされる（甲賀町市編纂委員会 1996・甲賀町教委 2003）が、現在は工場と宅地となり、土塁は残っていない。過去、工場建設に際して遺跡確認の発掘調査が実施されたが、何も発見されなかったという話を地元の方から聞いた。しかし、発掘調査に関する記録が残っておらず、現在では確認できない。

遺跡は、JR 草津線の北側に隣接しており、すぐ西側に甲賀駅がある。本遺跡の東側隣接地には補陀楽寺があり、その境内は補陀楽寺城遺跡となっている。また、JR 草津線の線路を挟んだ南側には陣山城遺跡がある。

調査経緯

周知の埋蔵文化財包蔵地「本望寺遺跡」の範囲内において宅地造成工事が計画された。遺跡内での土木工事であるため、文化財保護法の規定にもとづき、遺構の有無を確認する試掘調査を実施することとした。

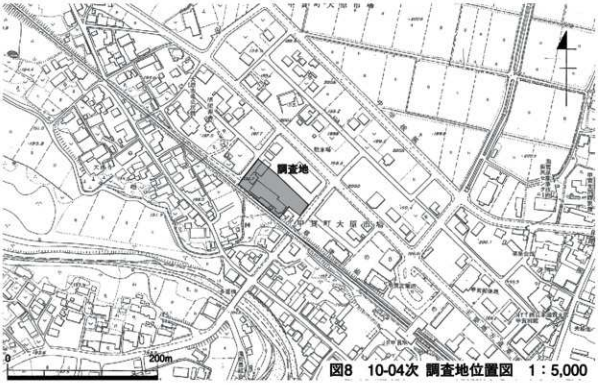


図8　10-04次 調査地位置図　1：5,000

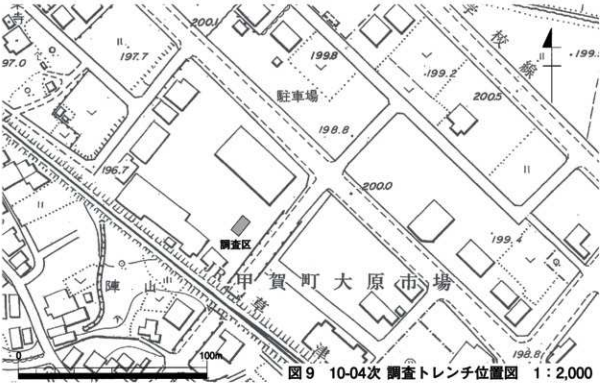


図9　10-04次 調査トレンチ位置図　1：2,000

工事対象面積は 3,378.73 ㎡であったが、その大半が工場となっていたため、調査を実施できる範囲は限られたものとなった。調査は 5m×8m、面積 40 ㎡のトレンチを設定し、平成 22 年 5 月 25 日に実施した。

調査概要

《基本層序》

基本層序は、上から①礫混じり黄褐色砂、②礫混じり褐色粘質土、③礫混じり青灰色粘質土、④礫混じり暗灰色粘質土、⑤礫混じり暗褐色粘質土、⑥礫混じり黄灰色粗砂、⑦暗灰色粘質土、⑧淡灰色砂礫、

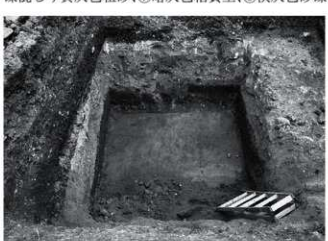


写真 4　調査区全景

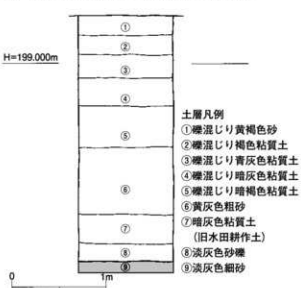


図10　土層断面図　1：40

⑨淡灰色細砂であった。①～⑥層は盛土、⑦層は旧耕作土、⑧･⑨層は地山であった。現地表面から240㎝下で⑧層、260㎝下で⑨層となる。遺構面と考えられる土層は確認できなかった。

《検出遺構・出土遺物》

今回の調査では遺構・遺物を確認することはできなかった。

まとめ

今回の調査では寺院に関する遺構や遺物を確認することはできなかった。そのため、明治時代中頃に廃絶したと伝えられる本望寺の存在を明らかにすることはできなかった。

1983 年度に甲賀地域で実施された「中世城郭分布緊急調査」の報告書によると、本望寺遺跡が位置する辺りにかつて存在したとされる土塁が破線で記載されている（滋賀県教委・㈶滋賀総合研究所 1984）。この土塁のあり方をみると、寺院跡とは考えにくく、むしろ JR 草津線を挟んで南側にある市場陣山城（現、陣山城遺跡）と一連の土塁である可能性が高い。甲賀市史によれば、昭和 38 年 (1963 年) に撮影された空中写真や地籍図から市場陣山城の範囲は現在よりも北側と東側へ広がっていたと推定する（甲賀市史編さん委員会 2010）。

しかし、現在はこの土塁は残っておらず、さらに遺跡範囲の大半は工場となっており、遺構はほとんど残っていない可能性が非常に高い。

今回の調査でも遺構・遺物ともに確認することはできなかったため、計画通りに宅地造成された。このような状況から考えると、本望寺遺跡は後世の開発や地形改変によって消滅してしまったと考えるのが妥当であろう。

＜参考文献＞

甲賀町教育委員会　2004 『甲賀町内遺跡詳細分布調査報告書』甲賀町理蔵文化財調査報告書（2）

甲賀町史編纂委員会　1996 『甲賀町史』資料編　甲賀町発行

甲賀市教育委員会　2008 『甲賀の横穴式石室－後期古墳群の調査報告－』甲賀市史編纂叢書第四集

甲賀市教育委員会　2011 『下川原遺跡第 11 次・竹石遺跡第 1 次発掘調査報告書』甲賀市文化財報告書第 17 集

甲賀市史編さん委員会　2010 『甲賀市史』第 7 巻　甲賀の城　甲賀市発行

滋賀県教育委員会・㈶滋賀総合研究所　1984 『滋賀県中世城郭分布調査』2

細川修平　2007 「第一章第三節　古墳と豪族」『甲賀市史』第 1 巻　古代の甲賀　甲賀市史編さん委員会編　甲賀市発行

図 11　旧地形と遺跡の推定範囲

10-05 次　竹石遺跡の調査

位置と経緯

調査位置

調査地は、柚川が甲賀丘陵と甲南丘陵の間から水口盆地へ流れ出る付近にあたり、柚川左岸の中位段丘の先端付近に立地している。段丘崖下の北側には県道 4 号草津－伊賀線が通っており、調査地との比高差は約 6m である。

調査地から北を望むと水口盆地を見渡すことができ、西側には飯道山がそびえている。西側の山麓部分には横穴式石室をもつ古墳が数多く築造され、「甲賀群集墳」（甲賀市史編さん委員会 2007、甲賀市教委 2008）と呼ばれている。

調査地周辺は南西から北東へ傾斜する地形である。昭和 40 ～ 50 年代にほ場整備が行われ、付近一面には水田が広がっている。ほ場整備施工以前の地形図でも周辺一帯は水田となっており、古くから広範囲に平坦地が広がっていたと考えられる。

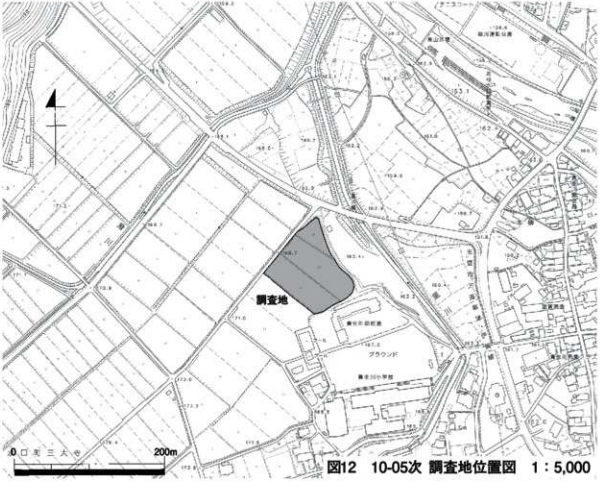


図12　10-05次 調査地位置図　1：5,000

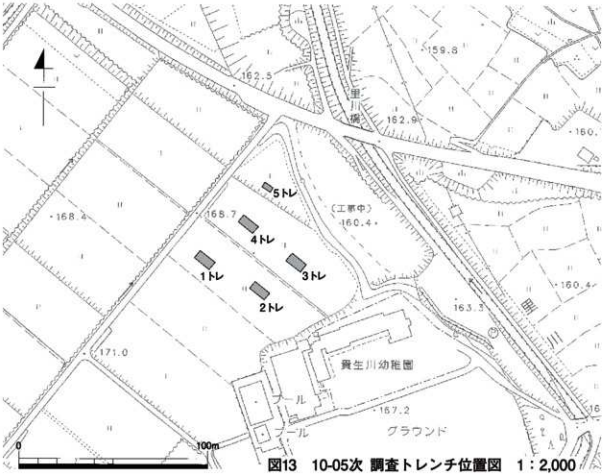


図13　10-05次 調査トレンチ位置図　1：2,000

調査経緯

水口町三大寺地内で認定こども園の建設が計画された。計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが、開発面積が 1,000 ㎡を越えるため、「甲賀市みんなのまち守り育てる条例」の規程にもとづき、遺跡の有無を確認する試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は、開発対象面積 8,916.97 ㎡に対してトレンチ 5 箇所、合計面積 215 ㎡で、平成 22 年 5 月 20 日から 5 月 22 日にかけて実施した。

調査概要

第 1 トレンチ

〈基本層序〉

第 1 トレンチの基本層序は、上から①耕作土、②床土、③黄灰色粘質土（遺構面）であった。遺構面（③層）の深さは、水田地表面から 35 cmと浅く、床土（②層）直下で遺構が検出できた。なお、遺構面の標高は 168.6m であった。

〈検出遺構〉

土坑 SK0101　調査区の北端で検出した不整円形の土坑である。確認した深さは 60 cm以上。素

掘りの井戸の可能性がある。土坑内から土師器、瓦器が出土した。

掘立柱建物 SB0102　柱間７尺（約2.1m）の掘立柱建物である。建物はほぼ方位に沿って建てられている。柱穴は残存する深さで約 30 ㎝～50 ㎝。

〈出土遺物〉

第１トレンチでは須恵器、土師器、瓦器などが出土した。

土坑 SK0101 と掘立柱建物 SB0102 の遺構内からは土師皿や瓦器が出土した。出土した遺物は細片がほとんどであったが、13 世紀と考えられる瓦器椀が含まれていた。

第２トレンチ

〈基本層序〉

第２トレンチの基本層序は、上から①耕作土、②床土、③暗褐色粘質土（ほ場整備時の盛土）、④黄灰色砂質土であった。④層は第 1 トレンチで確認した遺構面よりも砂質であった。④層の深さは水田地表面から 55 ㎝～60 ㎝であった。④層上面の標高は 168.4m である。

〈検出遺構〉

第２トレンチではピット状の遺構を数基確認したが、遺構内から遺物の出土はなく、建物などにまとまる様子もみられない状況だった。

〈出土遺物〉

第２トレンチでは遺物は出土しなかった。

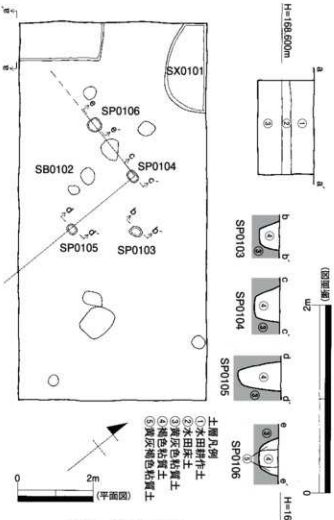


図14　第1トレンチ
平面図(1：100)・断面図(1：40)

写真５　第１トレンチ　遺構検出状況

第3トレンチ

《基本層序》

第 3 トレンチの基本層序は、上から①耕作土、②床土、③淡黄灰色シルト、④黄褐色粗砂であった。⑤層の深さは水田地表面から 50 ㎝であり、標高 167.7m である。

《検出遺構》

第 3 トレンチでは遺構を検出することはできなかった。

《出土遺物》

第 3 トレンチでは遺物は出土しなかった。

第4トレンチ

《基本層序》

第 4 トレンチの基本層序は、第 1 トレンチと同じく上から①耕作土、②床土、⑤黄灰色粘質土（遺構面）であった。遺構面の深さは水田地表面から 35 ㎝～40 ㎝であり、第 1 トレンチと同じく②層直下で遺構が検出できた。なお、遺構面の標高は 167.8m であった。

《検出遺構》

竪穴住居 SB0401　調査区の北東隅で北辺と西辺を確認した竪穴住居。残存する深さは約 25 ㎝。住居の規模は 5m×5m程度と推定できる。北辺の中央付近に土師器の甕が集中して出土する部分があり、わずかながら焼土も確認できるので、カマドの痕跡と考えられる。カマドは住居の北辺部中央付近にある。また、出土した土器から古墳時代後期の遺構と考えられる。

《出土遺物》

第 4 トレンチでは須恵器、土師器、瓦器などが出土した。

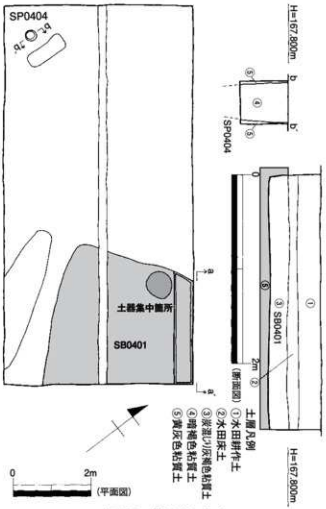


図15　第 4 トレンチ
平面図（1：100）・断面図（1：40）

写真 6　竪穴住居 SB0401 検出状況
土師器の集中箇所が竈跡

竪穴住居 SB0401 からは須恵器の杯 H や土師器の甕などが出土し、古墳時代後期のものと考えられる。

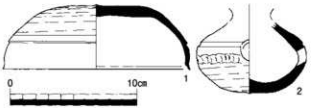


図16　10-05 次出土土器　1：3

第 5 トレンチ

《基本層序》

第 5 トレンチの基本層序は、第 3 トレンチ同様に上から①耕作土、②床土、③淡黄灰色シルト、④黄褐色粗砂であった。④層の深さは水田地表面から 50 cmであり、標高 166.7m である。

《検出遺構》

第 5 トレンチでは第 3 トレンチと同様に遺構を検出することはできなかった。

《出土遺物》

第 5 トレンチでは遺物は出土しなかった。

写真 7　試掘調査作業風景

まとめ

試掘調査の結果、第 1 トレンチで掘立柱建物や土坑を、第 4 トレンチで竪穴住居を確認した。また、両トレンチからは遺物も出土した。出土した遺物は須恵器、土師器、瓦器などであった。

出土した遺物の年代は 6 世紀と 13 世紀に大きく分けられ、検出した遺構も同様に区分できる。したがって、調査地周辺には古墳時代と中世の 2 時期の集落が存在していたと推測できる。

調査地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが、今回の試掘調査の結果、古墳時代と中世の 2 時期の集落を確認したため、調査地を周知の埋蔵文化財包蔵地として登録し、周辺の小字名から「竹石遺跡」と名づけた。

調査地は柚川左岸の中位段丘先端部に位置し、周辺には広範囲に平坦地が広がっている。また、調査地のすぐ北側には里川が流れるが、河川との高低差はかなりあり、洪水を受ける可能性は低い地域と考えられる。集落を形成するには非常にいい立地である。

今回の調査は、遺構の有無を確認することを目的とした試掘調査のため、調査面積も小規模であり、遺構の掘り込みを極力行わなかった。確認した主な遺構も竪穴住居 1 棟と掘立柱建物 1 棟である。しかし、調査地の周辺には広い平坦地が広がっており、広範囲に集落が存在した可能性は高い。

調査地の西の山麓には「甲賀群集墳」と呼ばれる 6 世紀前葉から 7 世紀にかけての群集墳が存在する。その数は、9 つの古墳群で、総数 286 基を数える（甲賀市教委 2008）。現在確認されている甲賀群集墳と同時期と考えられる古墳時代の集落は、水口盆地の中央部に位置する植遺

跡のみであるが、古墳群の広がりと古墳の数から考えると、もっと多くの集落遺跡が存在してもおかしくない。

今回の調査で確認した竪穴住居は、出土遺物から 6 世紀の遺構と考えられる。もし広範囲に集落が展開するとすれば、6 世紀の大規模集落となる可能性も考えられ、今回新たに発見した集落が「甲賀群集墳」と関係する可能性は高いと推定できる。今後、周辺の調査がさらに進展し、水口地域の古墳時代の様相が明らかになることを期待したい。

なお、試掘調査で確認した遺構については、開発事業者と協議の結果、建築物によって遺構に影響を及ぼす範囲を対象に本発掘調査を実施することとなり、平成 22 年 6 月 30 日から 7 月 31 日にかけて現地調査を行い、その後、平成 23 年 3 月 31 日まで整理調査を実施して発掘調査報告書を刊行した（甲賀市教委 2011）

＜参考文献＞

甲賀市教育委員会　2008 『甲賀の横穴式石室－後期古墳群の調査報告－』甲賀市史編纂叢書第四集

甲賀市教育委員会　2011 『下川原遺跡第 11 次・竹石遺跡第 1 次発掘調査報告書』甲賀市文化財報告書第 17 集

細川修平　2007 「第一章第三節　古墳と豪族」『甲賀市史』第 1 巻　古代の甲賀　甲賀市史編さん委員会編　甲賀市発行

10-13 次　上馬杉遺跡の調査

位置と経緯

調査位置

上馬杉遺跡は甲賀市甲南町上馬杉に所在する。浅野川の最上流部に位置し、現在の上馬杉の集落一帯を遺跡の範囲とする。遺跡は浅野川が開く丘陵谷部の平坦地に立地している。

上馬杉は北西に位置する下馬杉ともに中世に馬杉庄という荘園があったとされる地域で、遺跡の範囲内からは瓦器が採集されている（甲南町教委 1998）。過去に発掘調査は実施されておらず、遺跡の詳細は明確になっていないが、集落遺跡と推定される。

上馬杉遺跡の周辺には多くの城跡が存在している。東側に馬杉本城跡があり、西側には馬杉城跡がある。また、浅野川を挟んだ反対側の丘陵には井口氏城跡、馬杉中城跡、岡之下城跡、馬杉北城跡、染田砦跡があり、上馬杉遺跡を囲むように 7 ヶ所の城跡が立地している（甲賀市史編さん委員会 2010）。

調査経緯

周知の埋蔵文化財包蔵地「上馬杉遺跡」の範囲内において携帯電話基地局の建設工事が計画された。遺跡内での土木工事であるため、文化財保護法の規定にもとづき、遺構の有無を確認する試掘調査を実施することとした。

工事対象面積は 40 ㎡に対して、2.5m×4m、面積 10 ㎡の調査区を設定して試掘調査を実施した。調査期間は平成 22 年 11 月 25 日から 26 日であった。

写真 8　調査地全景

調査概要

《基本層序》

基本層序は、上から①耕作土、②暗褐色粘質土、③青灰褐色粘質土、④黄灰色粘質土（地山）で、現地表面から 50 ㎝で④層上面に到達した。

《検出遺構》

今回の調査では遺構を確認することはできなかった。

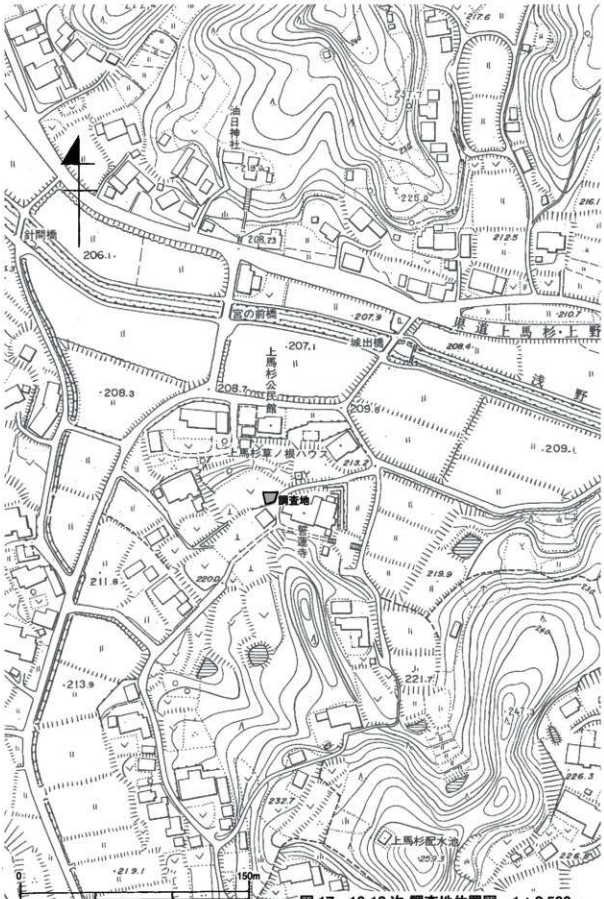


図 17　10-13 次 調査地位置図　1：2,500

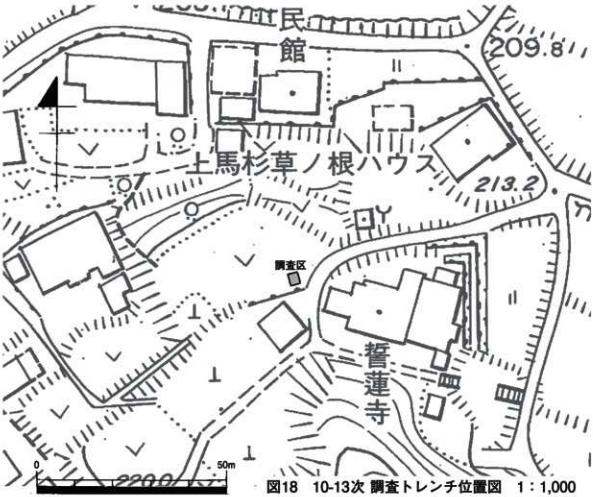


図18　10-13次 調査トレンチ位置図　1：1,000

《出土遺物》

調査区内から磁器や陶器が出土したが、すべて現代の製品であり、江戸時代以前に遡るものを確認することはできなかった。

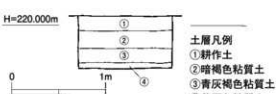


図19　土層断面図　1：40

まとめ

今回の調査では中世の馬杉庄と関係する集落の痕跡を確認することはできなかった。地元の方の話によれば、調査地は現在畑となっているが、以前は屋敷があり、調査位置の周辺には池があったという。③層の青灰褐色粘質土が水性堆積層に近い土層であったのはそのためで、出土遺物のほとんどが③層から出土したことを考えると、今回の調査で出土した

写真９　調査区全景

磁器や陶器はこの屋敷に関わるものである可能性が高い。

上馬杉遺跡の東に隣接する馬杉本城跡は『甲賀郡志』に「馬杉氏城址」とあり（滋賀県甲賀郡教育会 1971）、この地域が馬杉氏の本拠と伝えられることから名付けられている。ただし、馬杉氏の詳細は明らかではない。『甲賀郡志』に記されている甲賀五十三家の中にその名はみえず、実態を把握することは難しい。

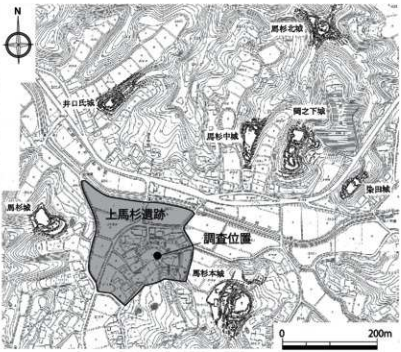


図 20　調査地と周辺の城跡　1：5,000

しかし、中世の荘園として馬杉庄という名が伝わっており、現在の地名として上馬杉・下馬杉の名が残る。地域の名を冠した土豪の存在は枚挙に暇がない。このことから考えても馬杉氏が存在したことは十分に推測でき、この地域を馬杉氏が治めていたと考えて大過ないであろう。

上馬杉遺跡は、地域の中心的存在である油日神社とともに上馬杉に分布する城に囲まれており、さらに要の城である馬杉本城址に隣接していることから考えて、馬杉庄の中心であった可能性が想定できる。

また、馬杉中城、岡之下城、染田砦、馬杉北城は単郭方形四方土塁という甲賀の定型から外れた実戦向きの縄張を備え、丘陵を越えた北側の柚川流域や大原庄方面を意識した築城であるとされる（村田 2010）。これら上馬杉に分布する城のあり方も馬杉氏や馬杉庄の実態を反映しているのかもしれない。

今回の調査は狭小な面積の試掘調査であり、遺跡の全体を把握することは不可能である。また、周辺に分布する多くの城跡との関係も明確にされているわけではない。今後、調査が進展して集落の全容が解明され、周辺の城跡との有機的な関係が浮かび上がることを期待したい。

＜参考文献＞

甲賀市史編さん委員会　2010 『甲賀市史』第７巻　甲賀の城　甲賀市発行

甲南町教育委員会　1998 『平成６～９年度　甲南町内遺跡詳細分布調査報告書』甲南町文化財調査報告書第４集

滋賀県甲賀郡教育会　1971 『甲賀郡志』下巻

村田修三　2010 「第一章第三節　甲賀の城」『甲賀市史』第７巻　甲賀の城　甲賀市史編さん委員会編　甲賀市発行

10-17 次　北泉遺跡の調査

位置と経緯

北泉遺跡は、平成 18 年 8 月 24 日から 28 日にかけて甲賀市教育委員会が実施した試掘調査（06-21 次）で発見された遺跡で、甲賀市水口町北泉・泉に所在する。遺跡範囲のうち国道 1 号の北側はすでに区画整理が行われ、旧地形が分からなくなっているが、南側には水田が広がり、旧地形を反映しているものとみられる。ただし、06-21 次は北側の区画整理地内で実施した調査であり、区画整理施工時に運よく遺構が破壊されずに地下に保存された状況となっていた。

06-21 次では竪穴住居や方形土坑のほか、多数のピットを確認している。試掘調査のため、遺構は平面検出のみで掘り込みを行っていないので、出土遺物の量は非常に少ない。明確な時期は判断できないが、奈良時代後半から平安時代前半にかけての集落遺跡であると考えられている。また、北泉遺跡のほぼ中央付近には 5 世紀中頃に築造されたと考えられる塚越古墳が存在する。同古墳は平成 13 年から翌年にかけて滋賀県教育委員会が発掘調査を実施し、一辺 52mの方墳で南辺を除く三方向に周濠を巡らせていたことが判明している（滋賀県教委・㈶滋賀県文化財保護協会 2004、細川 2007）。同調査では古墳の周辺から奈良時代の竪穴住居が 5 棟検出されており（滋賀県教委・㈶滋賀県文化財保護協会 2004）、06-21 次の調査地と隣接していることから考えて、周辺に奈良時代の集落が存在していたことを推測させる。

北泉遺跡では平成 21 年度までに遺跡の近隣地も含めて 7 度の試掘調査を実施している。

遺跡の北端部では平成 19 年度に 3 回の調査（07-37・40・46 次）を実施しているが、いずれの調査も盛土直下で地山である黄灰色粘質土または青灰色粘質土が露出し、遺構や遺物を確認することはできなかった。

遺跡の北西部では遺跡の範囲外であるが、平成 17・19・20 年度に調査（05-05・07-25・08-35 次）を実施している。05-05 次では水田床土直下で灰色粘土、その下層で青灰色粘土の湿地性堆積が確認された。また、07-25・08-35 次では北端部の調査と同様に盛土直下で地山である黄灰色粘質土または青灰色粘質土が確認された。いずれの調査も遺構や遺物を確認することはできなかった。

平成 22 年度は、遺跡の南東と南西の隣接地で試掘調査（10-06・14 次）を実施したほか、06-21 次調査地に近接した区画整理地内で調査（10-17 次）を行った。本報告では 10-17 次について詳細を記すこととする。

なお、10-06 次では水田床土直下で激しい湧水を伴った青灰色粘土層が露出した。また、10-14 次では湿地性堆積の暗灰色粘質土が確認でき、その下層は灰色砂礫層となっていた。両調査とも遺構や遺物を確認することはできなかった。

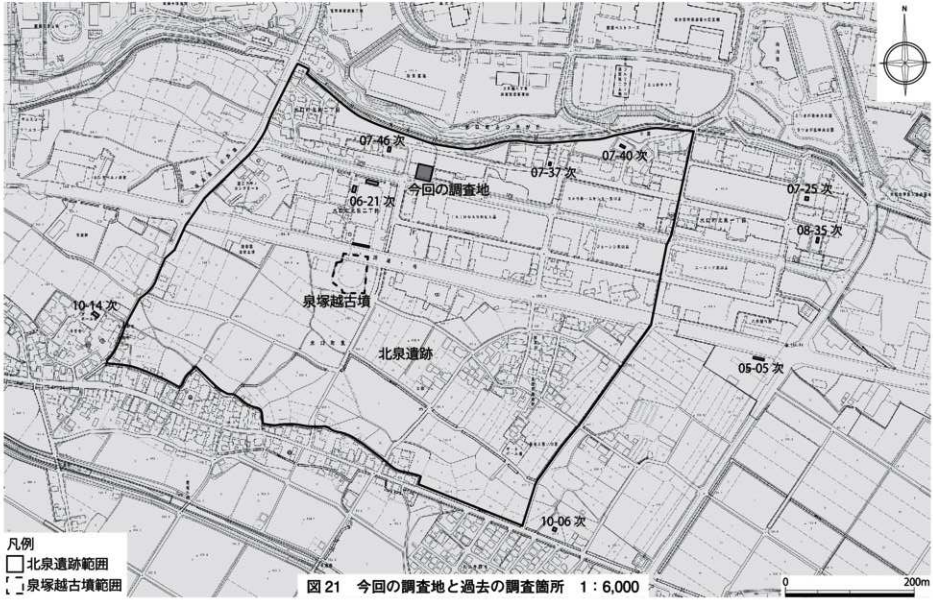


図 21　今回の調査地と過去の調査箇所　1：6,000

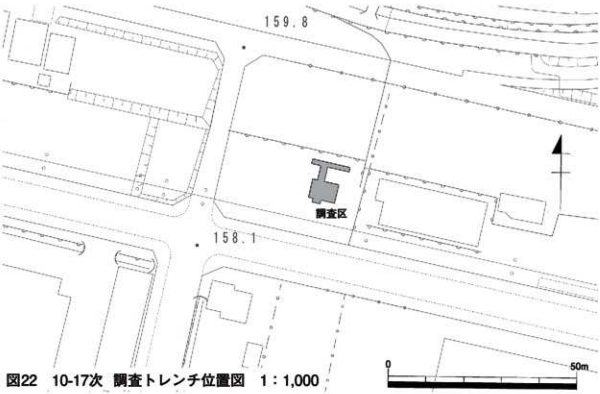


図22　10-17次　調査トレンチ位置図　1：1,000

10-17 次は集合住宅建築に伴う試掘調査で、調査位置は北泉遺跡の北半中央部にあたり、竪穴住居などを確認した 06-21 次の北東側に隣接する。北泉遺跡の様相を解明する上で重要であると考えて調査に臨んだ。調査面積は 40 ㎡、調査期間は平成 22 年 10 月 5 日から 6 日であった。

調査概要

《基本層序》

基本層序は、上から①表土（砕石層）、②黄褐色粘質土（区画整理造成土）、③黄灰色粘質土（遺構面・地山）である。現地表面から 10 ～ 30 ㎝で③層に達する。また、調査地は北から南に向って傾斜しており、②層は調査地内の北半部に部分的に存在する。なお、遺構は③層の上面で検出した。

写真 10　調査区全景

写真 11　SD0101

《検出遺構》

今回の調査で確認した遺構は、南北方向の素掘溝が 1 条（SD0101）のみである。遺構の主軸方位は北で 25°東に振る。幅約 50 cm、深さ 5 ～ 10 cm、遺構の残存状況は良くない。検出した溝の長さは約 9m で、調査地中央部から南側は消滅する。区画整理の造成により溝の南半分は削平されてしまったと考えられる。

《出土遺物》

溝 SD0101 から須恵器皿・杯 B・甕、土師器甕などが出土した。

まとめ

今回の調査地は、竪穴住居などが確認された 06-21 次の北東隣接地にあたるため、集落を構成する遺構の発見を期待して調査に臨んだ。しかし、確認できた遺構は溝 SD0101 のみで、それ以外の遺構を確認することはできなかった。溝からは奈良時代の須恵器や土師器が出土したが、溝 SD0101 が奈良時代の集落に伴う遺構であると判断するのは難しい。

区画整理以前の旧地形図をみると、今回の調査地は丘陵の南裾部にあたり、区画整理以前と以後の標高はほとんど変わらない。区画整理施工時に水田耕作土を除去し、盛土造成したことが今回の調査の土層断面からも確認できる。また、溝 SD0101 の主軸方位と旧

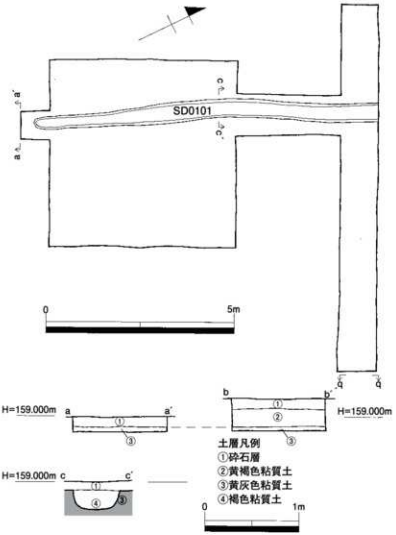


図23　平面図(1：100)・断面図(1：40)

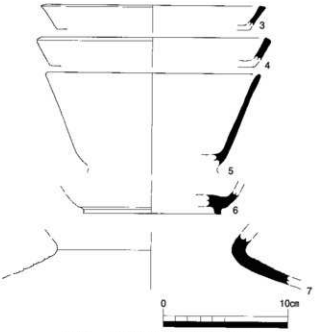


図24　10-17次出土土器　1:3

水田の方位がほぼ一致している。これらのことから考えると、今回の調査で検出した溝 SD0101 は水田耕作に伴う溝である可能性もあり、出土した遺物は奈良時代のものであるが、奈良時代の遺構であると断言できない。

調査地周辺の区画整理以前と以後の地形を比較すると、調査地の北側については旧地形の斜面を 1 ～ 3m ほど削平していることがわかる。また、調査地より南側については 1 ～ 1.5m ほどの盛土をして旧水田を埋めている。これは、南西隣接地の 06-21 次調査での遺構検出面が現況地表面からおよそ 1.5m 下であった状況と一致する。

北泉遺跡が所在する水口平野は野洲川の河岸段丘によって形成され、甲賀市内では最大の平野部となっている。そのため、水口平野には水田が広がり、現在でも国道 1 号の南側では旧地形をそのまま残すところも多い。条里制に関する研究も行われ、甲賀郡条里が復元されている（高橋 2004、今本 2007）。これらの研究成果によると、野洲川の河岸段丘上に条里地割が連続しているとされる。水口平野に分布する植遺跡や下川原遺跡などの集落遺跡もこの河岸段丘上に分布しており、古くから平坦地の確保できる段丘面上で人々が生活を営んでいたことがわかる。

北泉遺跡もまさに段丘面上に立地する遺跡である。遺跡の北端は水口丘陵に接し、野洲川の河岸段丘第 2 面と第 3 面にかけて集落が広がっていると推定される。今回の調査の結果、現在の北泉地域の区画整理地のうち、南側半分については区画整理施工時に盛土工事であったため、盛土の下に遺構が残っている可能性が高いことがわかった。また、北側半分については丘陵裾部を大きく削平している可能性が高いことも推定できた。今後の北泉遺跡の調査に大いに役立つデータが得られたと言えよう。ただし、北泉遺跡については狭小面積の調査が多く、遺跡の全体像を把握するためには資料が不足していることは否めない。遺跡の全体像の把握も含めて今後の調査成果に期待したい。

＜参考文献＞

今本　暁　2007 「第三章第四節　条里制の施行」『甲賀市史』第 1 巻　古代の甲賀　甲賀市史編さん委員会編　甲賀市発行

滋賀県教育委員会・㈶滋賀県文化財保護協会　2004 『泉塚越古墳』〈国道 1 号水口道路改修工事に伴う発掘調査報告書〉

高橋美久仁　2004 「近江国甲賀郡条理と弘福寺領蔵部荘」『歴史地理学』46 巻 2 号　歴史地理学会編・発行

細川修平　2007 「第一章第三節　古墳と豪族」『甲賀市史』第 1 巻　古代の甲賀　甲賀市史編さん委員会編　甲賀市発行

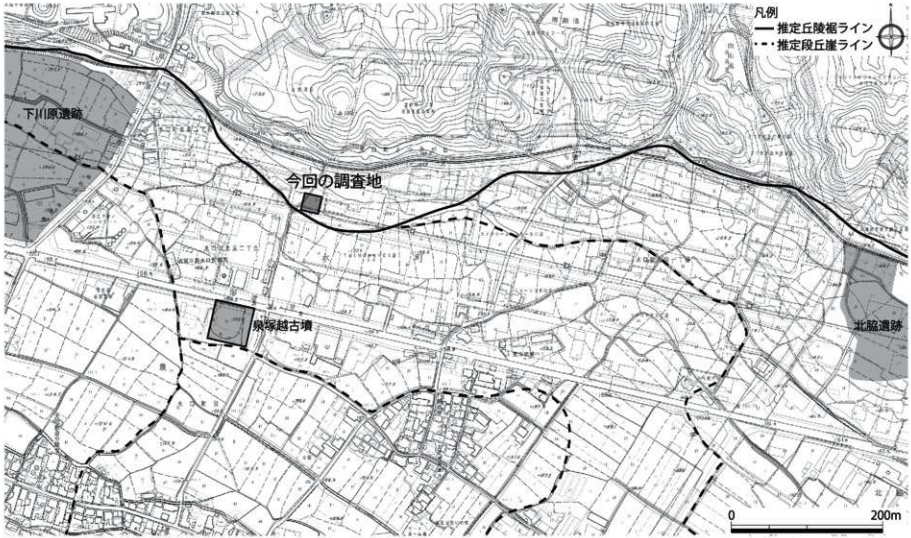


図 25　旧地形合成と推定段丘崖　1：5,000

10-19 次　倉治城遺跡の調査

位置と経緯

倉治城遺跡は甲賀市甲南町新治字西庵に所在する平地城館である。遺跡は、杣川の支流である磯尾川の河岸段丘上に立地し、現在の倉治集落の中に存在する。集落内に土塁や堀が良好な形で残っており、平地城館の構造がよく分かる。集落内は西から東に向って傾斜する地形となっている。

倉治城の方形区画を構成する土塁のうち、南側にある東西方向の土塁のすぐ外側で個人住宅の建替工事が計画された。土塁の外側には空堀状の落ち込みが確認できることから、城を構成する遺構が存在する可能性が高いと考え、既存建物を取り壊した後に試掘調査を実施した。

調査は新たに住宅を建築する位置にトレンチを設定して行った。トレンチの規模は 10m×10m、面積 100 ㎡で、調査期間は平成 22 年 10 月 25 日から 27 日であった。

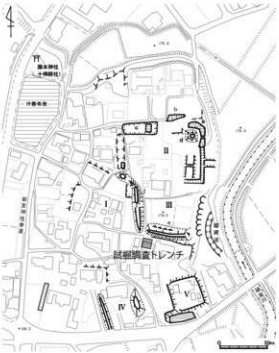


図 26　トレンチ位置図　1：4,000

調査概要

《基本層序》

基本層序は、上から①灰褐色粘質土（旧建物解体時整地層）、②暗褐色粘質土（盛土）、③黄灰色砂礫（地山）で、現地表面から 80 ㎝で③層上面に到達した。

《検出遺構》

今回の調査では遺構を確認することはできなかった。

《出土遺物》

調査区内から磁器が少量出土したが、すべて①層もしくは②層からの出土であり、2 次堆積によるものである。

写真 12　調査区全景

まとめ

今回の調査は倉治城遺跡の主郭となる方形区画の隣接地が対象地であったため、倉治城にかかわる遺構が発見されると期待して調査に臨んだ。しかし、既存建物の建替工事に伴う調査のため、設定した調査区内では後世の開発による削平や撹乱が著しく、倉治城に関する遺構を確認することはできなかった。

現状の倉治城遺跡は、倉治地区の集落内に土塁や堀などの遺構が残っている状況である。甲賀市史によれば、集落内の何箇所かで曲輪の痕跡がみられ、土塁と堀で囲まれた方形区画の外側に魚鱗状に屋敷地が展開していた状況を推定する（遠藤 2010）。また、地籍図の調査では四方に土塁と堀を伴う半町（約 50m）規模の方形区画が 4 つ連続する状況がみられるという（藤岡 2010）。

今回の調査では倉治城の構造を解明する資料は得られなかったが、集落内には旧地形の痕跡が多く残っており、今後の調査成果に期待したい。

＜参考文献＞

遠藤啓輔　2010 「141　倉治城跡」『甲賀市史』第 7 巻　甲賀の城　甲賀市史編さん委員会編　甲賀市発行

藤岡英礼　2010 「第二章第三節　描かれた城」『甲賀市史』第 7 巻　甲賀の城　甲賀市史編さん委員会編　甲賀市発行

10-20 次　紫香楽宮東遺跡の調査

位置と経緯

紫香楽宮東遺跡は甲賀市信楽町黄瀬に所在し、甲賀寺跡と考えられる国史跡紫香楽宮跡（内裏野地区）に隣接する。昭和 40 年代に行われた宅地造成の際に焼土や瓦、鋳造関係とみられる遺物が出土したというが、詳細は分からない。

昭和 61 年度に集合住宅の建築に伴う試掘調査を実施しているが、砂の堆積層が確認されただけで、遺構や遺物を確認することはできなかった。

今回は個人住宅の建築に伴う試掘調査を実施した。調査地は遺跡の北西部にあたり、国史跡紫香楽宮跡（内裏野地区）と隣接する位置にあることから、遺跡の様相を把握するだけでなく、史跡との関係性についてのデータも得られることが期待された。

調査面積は 25 ㎡、調査期間は平成 22 年 12 月 20 日から 21 日であった。

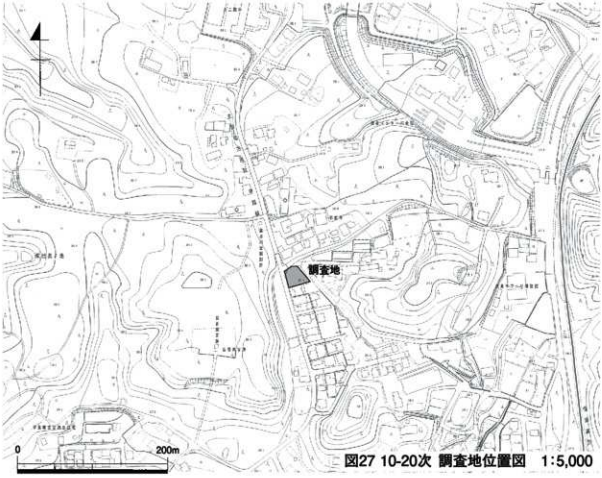


図27 10-20次 調査地位置図　1:5,000

図28　10-20次　調査トレンチ位置図　1:1,000

調査概要

〈基本層序〉

基本層序は、上から①黄褐色砂質土（表土、造成土）、②黄灰色砂礫（花崗岩風化土、地山）である。現地表面から 15 cmで②層に達する。表土直下で地山層が露出することから考えて、後世にかなりの削平を受けたと考えられる。

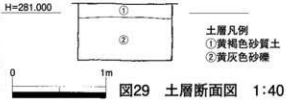
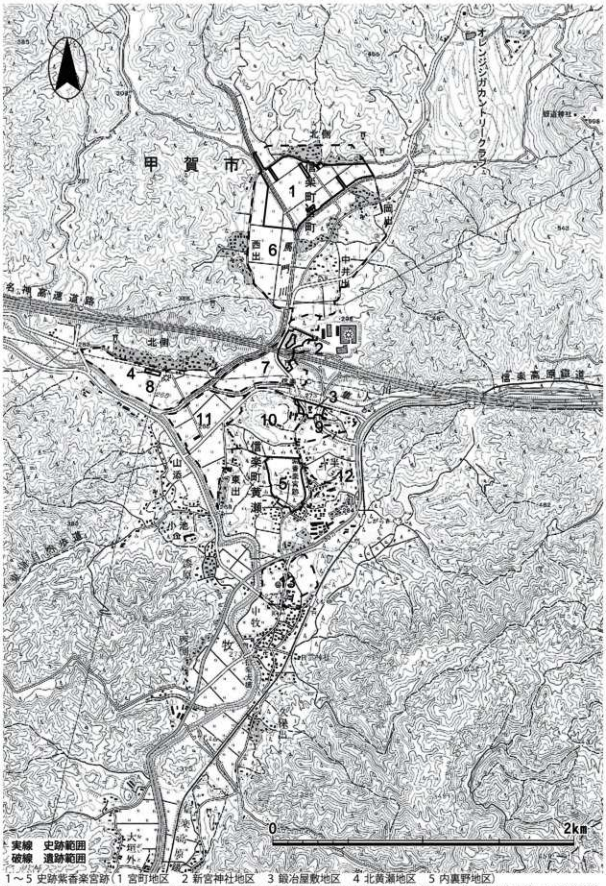


図29　土層断面図　1:40

写真 13　調査地全景

写真 14　調査区全景



1～5 史跡紫香楽宮跡　1 宮町地区　2 新宮神社地区　3 鍛冶屋敷地区　4 北黄瀬地区　5 内裏野地区）
6 宮町遺跡　7 新宮神社遺跡　8 北黄瀬遺跡　9 鍛冶屋敷遺跡　10 東山遺跡　11 東出遺跡　12 紫香楽宮東遺跡　13 雲井遺跡

図30　紫香楽宮跡と周辺の遺跡

《検出遺構》

今回の調査では表土直下で地山層が露出し、人為的な遺構を確認することはできなかった。

《出土遺物》

今回の調査で遺物は出土しなかった。

まとめ

今回の調査地は国史跡紫香楽宮跡（内裏野地区）と隣接する位置にあることから、史跡との関連性に関する資料を得ることができると期待されたが、調査の結果、遺構・遺物ともに確認することはできなかった。

調査地では表土直下で地山層が露出し、後世にかなりの削平を受けたと考えられ、昭和 40 年代に行われた宅地造成で大きく地形が改変されたものと推定される。また、焼土や鋳造関係の遺物なども確認することはできなかったため、周辺に瓦窯や生産関係の遺構が存在した痕跡はわからなかった。

したがって、今回の調査では紫香楽宮東遺跡に関するデータを得ることはできなかった。遺跡の詳細については、今後の調査成果に委ねることとしたい。

10-21 次　大垣外遺跡の調査

位置と経緯

大垣外遺跡は甲賀市信楽町勅旨に所在する。遺跡は大戸川の左岸に広がる平坦地に立地し、北側の丘陵上に県史跡勅旨古墳群が存在する。また、西側の丘陵には 18 世紀後葉以降の信楽焼の窯跡が数多く存在し、これらの窯跡は信楽焼古窯跡群のうち、勅旨支群の大垣内小支群に属する（信楽町教委 2003）。さらに、南側には大垣外南遺跡が隣接しており、過去の調査で石鏃、土師器、下駄などが出土している。

平成 20 年度には遺跡の中央東部分で試掘調査を実施した（08-35 次）。この調査では中世から近世にかけての陶磁器が出土したが、すべて大戸川の氾濫による流れ込みと考えられるもので、遺構を検出することはできなかった。

今回の調査は宅地造成に伴う試掘調査であった。調査地は 08-35 次の西方に位置し、遺跡の立地する平坦部の中で大戸川から最も離れた位置にあたる。東側に隣接する丘陵には信楽焼古窯跡群（勅旨支群－大垣内小支群）が存在する。

調査面積は 50 ㎡、調査期間は平成 21 年 12 月 1 日から 3 日であった。

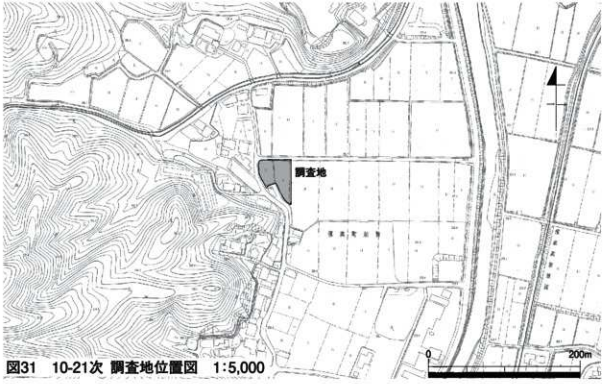
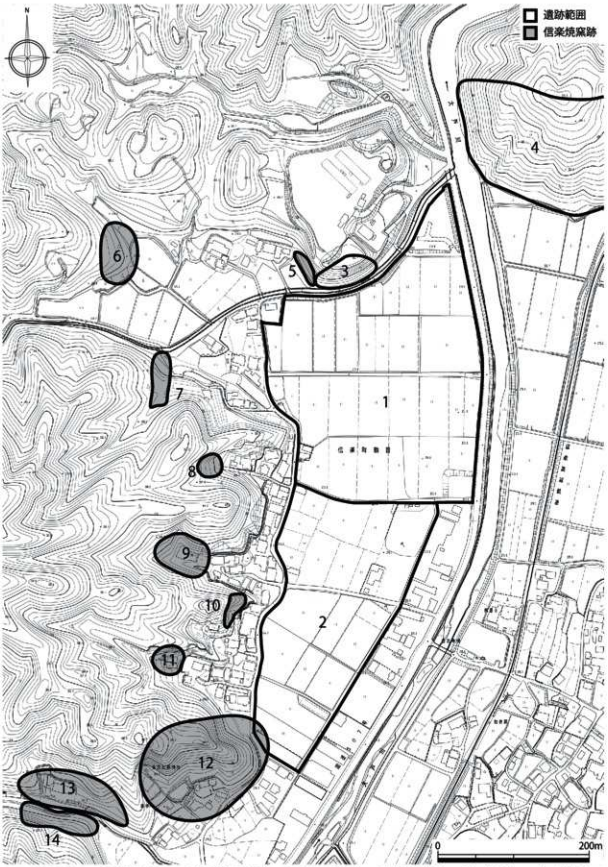


図31　10-21次 調査地位置図　1:5,000



1 大垣外遺跡　2 大垣外南遺跡　3 県史跡勅旨古墳群　4 保良山南古墳群　5 北大垣外遺跡　6 池の谷遺跡　7 窯の谷遺跡
8 葛上遺跡　9 石屋原遺跡　10 葛上東遺跡　11 葛上南遺跡　12 宗安谷遺跡　13 小西出北遺跡　14 小西出遺跡

図32　大垣外遺跡と周辺の遺跡および窯跡　1:5,000

図33　10-21次 調査トレンチ位置図　1:1,000

調査概要

《基本層序》

基本層序は、上から①水田耕作土、②水田床土、③灰色砂＋灰色粘土の互層（流水性堆積層、調査区東半部のみ）、④暗灰褐色粘土、⑤暗灰色粘土、⑥青灰色粘土（地山）であった。④･⑤層は湿地性堆積層と考えられる。各層の深さは、水田表面からで③層が50㎝、④層が65㎝、⑤層が110㎝、⑥層が165㎝である。

《検出遺構》

今回の調査では遺構を確認することはできなかった。

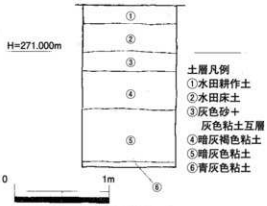


図34　土層断面図　1:40

写真15　調査区全景

写真16　土層断面

④･⑤層の堆積状況から調査地周辺は元来、湿地帯であったと考えられ、その後、大戸川の氾濫に伴って③層が堆積したものと推測される。

《出土遺物》

今回の調査で出土した遺物は土師器と信楽焼である。信楽焼は擂り鉢とさや鉢が出土したが、すべて水田床土である②層からの出土で、2次堆積によるものであった。

土師器は④･⑤層の湿地性堆積層から出土した。摩滅が著しく、小破片であるため、年代を特定するのは困難である。

まとめ

今回の調査地は大垣外遺跡の中央西部に位置し、大戸川から離れた立地のため、遺跡の性格や内容を把握する資料を得ることが期待された。しかし、調査の結果、遺構を確認することはできず、大戸川の氾濫によると考えられる流水性堆積層と湿地性の粘土層を確認したにとどまった。
また、土師器や信楽焼が出土したが、どちらも遺跡の性格を反映するものではなかった。湿地性堆積層から出土した土師器は、小破片で摩滅が著しいため、年代を特定する資料にはなり得なかった。かなりローリングを受けたものと考えられる。

一方、信楽焼は擂り鉢やさや鉢が出土したが、すべて2次堆積層からの出土で原位置を保っているとは考えられない。おそらく西側丘陵に点在する信楽焼古窯群からの流れ込みであると推測される。

今回の調査で大垣外遺跡に関するデータを得ることはできなかった。遺跡の詳細については、今後の調査成果に委ねることとしたい。

【参考文献】

信楽町教育委員会 2003 『信楽焼古窯跡群分布調査報告書』信楽町文化財報告書第11集

第２章　08-27 次（貴生川遺跡）出土遺物

はじめに

試掘調査 08-27 次は、土地区画整理事業の計画に伴って遺跡の有無を確認するために平成 20 年 12 月 8 日から平成 20 年 12 月 19 日にかけて調査面積 680 ㎡で実施した調査である。検出遺構の概要についてはすでに報告した（甲賀市教委 2010）が、瓦器などが多く出土したため、整理調査が十分に行えず、遺物についてはほとんど報告できていなかった。そのため、今回、改めて 08-27 次で出土した遺物について報告する。

検出遺構の概要

試掘調査は 13 箇所のトレンチを設定して実施した。第 2・3・5・9 ～ 13 トレンチにおいて遺構面と考えられる黄色粘質土層を確認し、溝や柱穴、土坑などの遺構を検出した。このうち、第 9・10 トレンチから多くの遺物が出土している。

以下、第 9 トレンチと第 10 トレンチの遺構について概要を記す。

図35　08-27次 調査トレンチ位置図　1:2,000

第 9 トレンチ

SB0901　桁行 3 間（8.5 尺等間）、梁行 3 間（7.5 尺等間）の総柱の掘立柱建物である。柱掘形は直径 30cm 程度の不整な円形もしくは方形で、深さは約 20 cmである。建物の主軸方位は北で東に約 45 度の振れをもつ。建物の形状から考えて倉庫である可能性が高い。柱堀形の中から 13 世紀の瓦器が出土している。

SD0902　幅 1.5m、深さ 30cm の東西方向の溝。埋土は暗褐色粘質土で、顕著な流水痕跡はみられない。埋土から瓦器・土師器・陶器が出土する。

第 10 トレンチ

SX1001　隅丸方形の土坑。南端は調査区外へ続く。土坑全体の大きさは定かではないが、一辺が 3.7m 前後になると考えられる。中央部が円形に窪んでおり、深さは最も深い部分で 70cm。埋土は炭化物を含む黒褐色粘質土である。土坑の中からはコンテナ 2 箱分の大量の瓦器や土師皿が出土したが、そのほとんどが細片であることから、廃棄土坑と考えられる。出土した遺物の時

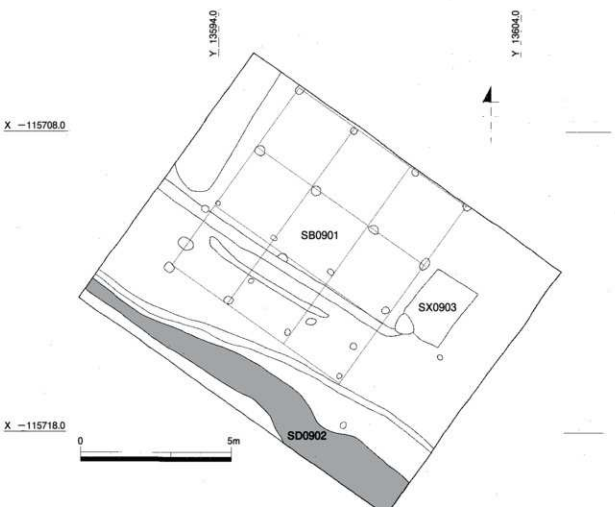


図36　9トレ平面図　1:125

期は 13 世紀と推定される。類似する遺構として第 9 トレンチで検出した土坑 SX0903 がある。試掘調査のために遺構を掘り込んでいないが、形状や埋土からみて、SX1001 と同様の遺構と考えられる。検出状況から同様の土坑が複数存在すると推測できる。

SD1002　幅 2m、深さ約 30cm の素掘溝。南から東にかけて蛇行する。埋土から磁器が出土した。近世の遺構と考えられる。

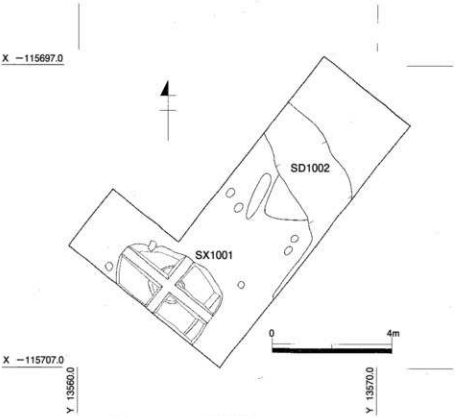


図37　10トレ平面図　1:125

出土遺物の概要

08-27 次で出土した遺物大半は瓦器と土師器である。第 9 トレンチと第 10 トレンチから特に多くの遺物が出土した。以下、その中で一定のまとまりが認められる SD0902 と SX1001 から出土した土器について記す。

SD0902 出土土器

土師皿 (8～11)　成形技法はすべて手づくねである。8～10は口径8～9cm、器高1～1.5cmの一群。底部から口縁部が屈曲するもの（8）、底部から湾曲しながら口縁部が立ち上がるもの（9）、底部に凹凸があり、底部から口縁部が屈曲するもの（10）がある。いずれも口縁部外面の上方 1／2 をヨコナデ調整し、口縁部外面下半と底部外面は無調整である。そのため、底部外面から口縁部外面下半にかけてユビオサエの痕跡を明瞭に残す。

11 は口径 12.5 cm前後、器高 2 cm前後のやや大きめのタイプである。底部が非常に薄く平らで、底部から強く屈曲して口縁部が立ち上がる。口縁部はやや外反し、口縁端部は丸くおさまる。前者と同様に口縁部外面上方 1／2 をヨコナデ調整し、底部外面から口縁部外面下半にかけてユビオサエの痕跡を明瞭に残す。

瓦器皿（12） 口径約 10 cm、器高約 2 cm。器壁がやや厚い。体部中間付近に屈曲があり、やや腰の張った器形である。口縁端部の内側に段がつく。体部内面は細いヘラミガキが施されているが、外面にヘラミガキはない。体部下半は調整されず、ユビオサエの痕跡を明瞭に残す。

瓦器椀（13 ～ 16） 口径 12 ～ 12.5 cm、器高 3 cm前後のもの（13・14）と口径 13 ～ 13.5 cm、器高 3.5 ～ 4.0 cmのもの（15・16）がある。14 は摩滅が著しいために体部内面のヘラミガキが不明瞭だが、いずれも細いヘラミガキを施しており、15 は密である。体部外面は口縁部付近までユビオサエの痕跡を残しており、雑な調整しか施されていない。高台は断面三角形の低い貼り付け輪高台である。体部の中間点付近に屈曲点があり、腰の張った器形となる。口縁端部内側に段がつく。近江産の特徴を備えると考えられる。

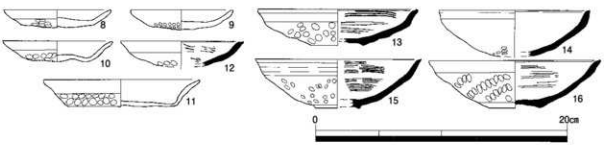


図38　SD0902出土土器　1:3

SX1001 出土土器

SX1001 からは多くの瓦器と土師皿が出土したが、瓦器は細片ばかりで図化できるものがなかった。図化が可能であった土師皿のみ報告する。土師皿はいずれも手づくね成形である。

17 は口径 7.8 cm、器高 2.0 cm。口縁部がやや内湾気味に立ち上がる。口縁部外面上方 1 ／ 2 のみにヨコナデを施し、下半および底部外面は無調整となる。ユビオサエの痕跡を明瞭に残す。

18 は口径 8.9 cm、器高 1.6 cm。口縁端部が丸くおさまり、やや厚くなる。17 と同様に口縁部外面上方にのみヨコナデを施し、下半にはユビオサエの痕跡が残る。

19 は口径 12.9 cm、器高 2.3 cm。やや大きめな土師皿である。薄い底部から口縁部が強く屈曲した後、外側に開く。17・18 とは異なり、体部外面はヨコナデで調整し、ユビオサエの痕跡を残さない。

図39　SX1001出土土器　1:3

まとめ

08-27 次調査で出土した遺物の大半は瓦器と土師皿であった。瓦器椀の体部外面にヘラミガキが施されず、かなりの省略傾向が窺える。さらに、器高も 4 cm以下と低い。これらの特徴から考えて、瓦器椀の年代は 13 世紀後半代の製品と推測できる。

小規模なトレンチでの試掘調査であったが、遺物の出土傾向からみて、中世の集落が存在した

のは間違いない。SB0901 を検出した第 9 トレンチの周囲を中心に集落が展開していくと想定できる。

調査地の南側には西福寺という寺院があり、その境内には鎌倉時代後期の造立と言われる宝篋印塔がある。中世の大規模集落が存在した可能性もあり、今後の調査成果に注目していきたい。

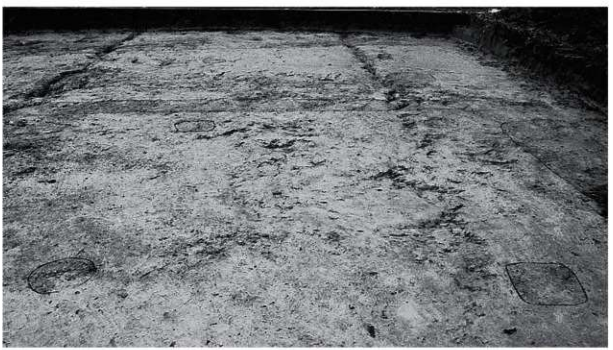


写真 17　SB0901 検出状況

写真 18　SD0902 検出状況

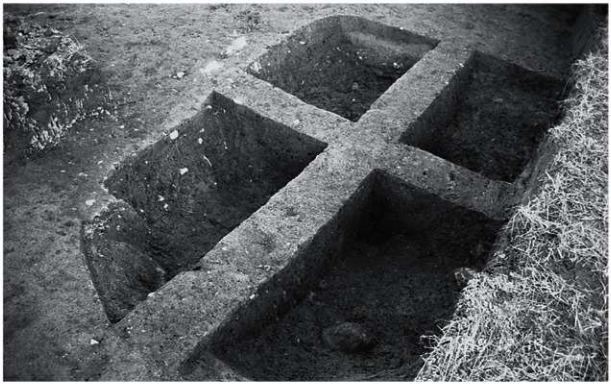


写真 19　SX1001

写真 20　08-27 次　調査地全景（北から）

報告書抄録

ふ り が な	こうかしまいぞうぶんかざいちょうさねんぽう
書　　名	甲賀市埋蔵文化財調査年報
副　書　名	平成22年度試掘調査
巻　　次	
シリーズ名	甲賀市文化財報告書
シリーズ番号	第19集
編 著 者 名	小谷徳彦
編 集 機 関	甲賀市教育委員会
所　在　地	滋賀県甲賀市甲南町野田８１０番地
発行年月日	平成24年(2012年)　月　日

所収遺跡(ふりがな)	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	世界測地系 北緯	世界測地系 東経	調査面積(㎡)	調査期間	調査原因
水口城遺跡(みずぐちじょういせき)	甲賀市水口町本丸(こうかしみなくちちょうほんまる)	25209	363-113	34° 58′ 9″	136° 9′ 51″	15	2010.5.11	個人住宅
水口城遺跡(みずぐちじょういせき)	甲賀市水口町中邸(こうかしみなくちちょうなかやしき)	25209	363-113	34° 58′ 17″	136° 9′ 46″	10	2011.3.7	個人住宅
本望寺遺跡(ほんもうじいせき)	甲賀市甲賀町大原市場(こうかしこうかちょうおおはらいちば)	25209	365-038	34° 54′ 10″	136° 12′ 39″	40	2010.5.25	宅地造成
竹石遺跡(たけいしいせき)	甲賀市水口町三大寺(こうかしみなくちちょうさんだいじ)	25209	363-127	34° 56′ 59″	136° 8′ 45″	215	2010.5.20 ～ 2010.6.10	認定こども園
上馬杉遺跡(かみあすぎいせき)	甲賀市甲南町上馬杉(こうかしこうなんちょうかみあすぎ)	25209	366-089	34° 52′ 27″	136° 12′ 2″	10	2010.11.25 ～ 2010.11.26	携帯電話基地局
北泉遺跡(きたいずみいせき)	甲賀市水口町北泉(こうかしみなくちちょうきたいずみ)	25209	363-104	34° 59′ 6″	136° 8′ 21″	40	2010.10.5 ～ 2010.10.6	集合住宅
倉治城遺跡(くらじじょういせき)	甲賀市甲南町新治(こうかしこうなんちょうしんじ)	25209	366-045	34° 55′ 20″	136° 9′ 48″	100	2010.10.25 ～ 2010.10.27	個人住宅
紫香楽宮東遺跡(しがらきぐうひがしいせき)	甲賀市信楽町黄瀬(こうかししがらきちょうきぜ)	25209	367-049	34° 55′ 9″	136° 9′ 48″	25	2010.12.20 ～ 2010.12.21	個人住宅
大垣外遺跡(おおがいといせき)	甲賀市信楽町勝旨(こうかししがらきちょうかつむね)	25209	367-083	34° 53′ 52″	136° 4′ 13″	50	2010.12.1 ～ 2010.12.3	宅地造成
貴生川遺跡(きおいがわいせき)	甲賀市水口町貴生川(こうかしみなくちちょうきおいがわ)	25209	363-091	34° 57′ 26″	136° 8′ 55″	680	2008.12.8 ～ 2008.12.19	土地区画整理

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
水口城遺跡	城館	近世	土坑	土師器、陶器	
本望寺遺跡	寺院	中世			
竹石遺跡	集落	古墳・中世	竪穴住居、掘立柱建物	須恵器、土師器、瓦器	
上馬杉遺跡	集落	中世			
北泉遺跡	集落	古代	溝	須恵器、土師器	
倉治城遺跡	城館	中世		磁器	
紫香楽宮東遺跡	生産遺跡	古代			
大垣外遺跡	生産遺跡	古代		土師器、陶器	
貴生川遺跡	集落	平安	掘立柱建物、溝、土坑	瓦器、土師皿	

甲賀市文化財報告書第19集

甲賀市埋蔵文化財調査年報

平成22年度試掘調査

印刷・発行　2012年3月23日

編集・発行　甲賀市教育委員会

滋賀県甲賀市甲南町野田810番地

TEL　０７４８－８６－８０２６

FAX　０７４８－８６－８２１６

印　　刷　村田印刷株式会社